

「こちらの候補を取り上げて、いっしょにやる。こんな絵を描ければなあ。今のうちの幹部にはそんな人はいないだろうな」。今から十数年前、道内の共産党関係者がため息交じりに、漏らすのを聞いたことがある。

当時、共産党は「孤立」していた。衆院選では小選挙区になったため、議席が取れず、比例で一議席を確保しただけ。その比例も削減され、議席はしばらくゼロになった。参院選も同様だ。北海道選挙区での議席はほど遠かった。野党共闘からも共産党は外されていた。よく言えば、ぶれない筋の通った政党、別の言い方をすれば、「正しいのは自分の党だけ」という唯我独尊の政党だった。

これまでも共産党への支持が伸びた時期もあった。例えば、一九九九年の道議選では、二議席から一気に六議席まで増やした。ただし、それは、道知事選で史上初の自民党と民主党の相乗りが実現したことへの有権者の批判でもあった。共産党が躍進する場合は、与党に対抗する有力な候補や政党がなく、批判票の行き先がない場合が多い。共産党はこの有権者の消極的支持を本当の意味での支持に変えられなかった。そして、与党への対抗勢力が力をつけられ、支持が離れ、再び議席を減らすという悪循環を繰り返してきた。

だが、今や、共産党は「野党統一候補」の一角を占めつつある。自民党が一強状態ということも影響しているが、唯我独尊の

衆院補選の行方

姿勢も影を薄めている。二〇一五年四月の道知事選では民主党と共闘した。今夏の参院選の前哨戦となる四月の衆院北海道五区補選では、一度出馬表明した候補を降ろし、民主党と組んだ。明らかに変わってきた。冒頭の共産党関係者の指摘がようやく実現しつつある。「孤立から共闘へ」。路線をシフトしている。

◇ 他党との関係において、これまで共産党と対照的な動きをしてきたのが、鈴木宗男氏が率いる地域政党・新党大地だ。

◇ 大地の特徴を示すエピソードがある。五年ほど前、ある道民が、再生可能エネルギーの件で、道内選出の国会議員や政党を回った時のことだ。多くの国会議員事務所や政党は、秘書や職員らが対応し、要望を聞き置くだけだったのに対し、鈴木氏は自らが対応し、その場で道内の関係する首長や議員に電話をかけた。この道民は「思想信条はともかく、鈴木氏の対応の早さには感心した」と振り返る。

大地には組織的支持基盤があるわけではない。道民の要望にはきめ細かに対応し、実現を図る。それが道内各地に広く薄く支持者を広げていく。こうしたポピュリズムといえる政治を実現するには、いかに政権や与党の近くにいるかが重要だ。

大地のこれまでの行動を見よう。民主党政権ができる、鳩山由紀夫氏に近づき、民主党政権が終わり、安倍政権による

一強時代が続けば、自民党へと「鞍替え」する。衆院五区補選での大地は、民主から自民との共闘へと転身した。政策の異なる共産党とは一緒に戦えないが理由だが、より権力を持つ政党と共闘することによって、自らの政策を実現することができるという意味からすると、大地の今回の行動は必然でもある。政権与党との距離が大地の生命線でもあるのだ。

◇ 四月一二日に公示、二四日に投票票される衆院補選は、道五区のほか、京都三区の二選挙区で行われる。京都三区は、「イクメン議員」だった宮崎謙介氏が自らの不倫問題で辞職した影響で、自民が不戦敗を決めており、道五区補選の結果が、安倍政権の今後を占う意味でも重要度を増している。その鍵を握るのが、共産票と大地票の行方でもある。「孤立から共闘を選んだ」共産党、「共闘相手を変えた」大地を、有権者がどう判断するのか。とりわけ無党派層の動向が焦点となる。

米大統領選の民主、共和両党の予備選では、「ポピュリスト」のトランプ氏と、「社会主義者」のサンダース氏が事前の予想を覆し、支持を伸ばしている。道五区補選でも、ポピュリズムの大地と、社会主義を掲げる共産党が鍵を握るのは、世界的な有権者の意思の表れなのかもしれない。そういう意味でも、補選の結果が気になる。

ハ洋▽